

Title	都市のなかの「ふるさと」 : 京阪神芝会の一曰
Author(s)	小林, 多寿子
Citation	年報人間科学. 7 P.17-P.35
Issue Date	1986
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6966
DOI	10.18910/6966
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九八六年三月）

『年報人間科学』第七号一七頁—三五頁

都市のなかの「ふるさと」

—京阪神芝会の一—

小林多寿子

都市のなかの「ふるさと」

——京阪神芝会の日——

- 一、はじめに
- 二、一日の流れ
- 三、会場の人びと
- 四、構成された「ふるさと」
- 五、都市のなかの「ふるさと」——Sさんの語る芝会——
- 六、おわりに

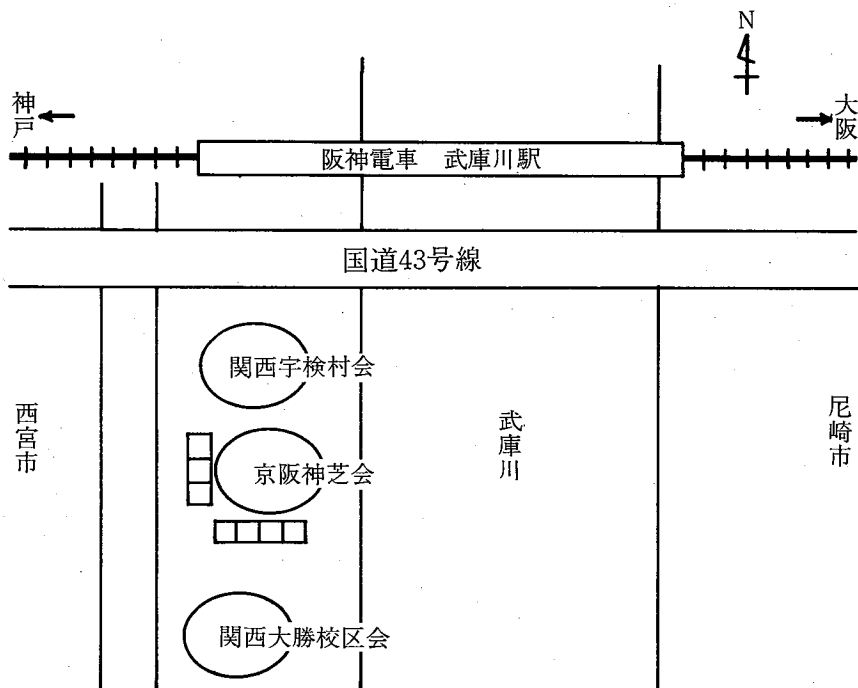
一、はじめに

一九八五年五月二六日、さわやかな風の吹く快晴のこの日、尼崎市と西宮市の間を流れる武庫川の国道四三号線より三百mほど下流の西宮側広場では三つの運動会がおこなわれていた^①。北側では関西宇検村会、真中で京阪神芝会、南側では関西大勝校区会、いずれも奄美出身者の同郷団体^②が催した運動会である。関西、とりわけ阪神都市圏に居住する奄美出身者は、二〇万人とも三〇万人ともいわれており、その数は出身地である奄美諸島の人口（一九八〇年、十五万六千人）を上回ると推定される。彼らは、村ごと字ごとに同郷団体をつくり、武庫川河川敷では、とくに九月、十月の毎日曜日、この同郷団体の開く運動会（「総会」と称するところが多い）で大層

にぎわう。

この運動会では、スプリンレースやリレーのような一般的な運動会の競技種目に加え、土俵をつくって相撲がとられたり、豊年祭の踊りや三味線にあわせた島唄が披露されたり、人びとが島ことばで談笑し合つて、さながらふるさと・奄美が出現したかのような一日である。また、阪神都市圏に居住する彼らにとって、この武庫川はシマの人に一年に一度会えるところというシンボリックな地点ともなっている。そこでこの日この場所で行きだされた「ふるさと」を記述し、再構成しながら、彼らが都市に生きつつ、わかちもつていける世界を描きだすことを試みたいと思う。

この日「第五三回総会並びに敬老会」をおこなった京阪神芝会^③は、数多くある奄美出身者の同郷団体の一つである。母村は、加計呂麻島西端に位置する鹿児島県大島郡瀬戸内町芝で、世帯数六四戸人口一三八人（一九八三年^④）の小さな集落である。本稿は、五月二六日の京阪神芝会に焦点をあて、その前後の三月三日と六月九日におこなわれた役員会の記録と、会長Sさんのライフ・ヒストリーとで補いながら^⑤、京阪神芝会がつくりだした世界を再構成することを試みるものであり、「ふるさと」を媒介にしながら生きていく奄美



[図1] 運動会の会場

出身者にとって都市がどのような意味をもっているのかを考えていくための基礎となるフィールド・ノートである。

二、一日の流れ

午前十一時、阪神電車武庫川駅の武庫川上にかかるホームから下流をながめると、国道四三号線南側にいくつもの紅白の幕とテントがはられているのがみえる。すでに開会の準備は整っているようだ。電車から降りた何組かの人たちは、弁当の入った包みと水筒をもち、武庫川の土手を会場に向かって歩いていく。予定では十時開会であるが、来賓と会員のどちらも半分くらいしか集まってない。会長のSさんは、「いつも来るのが遅いんですよ、集まりがね」といい、この時間のルーズさを「奄美時間」あるいは「大島時間」と表現していた。

「京阪神芝会」と青地に白で染めた幟りのたつ会場に来ると、一番北側のテントの「受付」と書いてある紙の貼られた机に四人の人が座っている。芝会の会員からは年会費三千元を徴収し、来賓からは寄付を受けとる。それと引き換えに「京阪神芝会」と染めたタオルと今年九年ぶりに改訂した芝会の名簿の入った袋が渡され、来賓にはリボンがつけられる。来賓の寄付は、縦三〇cm横一〇cmくらいの紙にその金額と氏名あるいは同郷団体の名称が書き込まれ、テント前面の天幕にまるで縁飾りのように貼りつけられ、披露されていく。寄付金は一人三千元から五千元で、一万円という人もある。五千元

という人が多いようだ。この日の寄付金総額は四二万円で、「会費四割、寄付六割」といわれるように、会にとつて重要な収入である。

受付をすませると、顔見知りの役員にあいさつをしながら、来賓、一般会員それぞれのテントに入っていく。テントは全部で七張はられており、本部・来賓の席として三張、一般会員用に四張設営されている。京阪神芝会のテントのほかに、「阪神実久平和会」と記されたものが四張あり、出身校区が同じである他の同郷団体から借りたものである。来賓の席では、婦人部の接待係の人が二合入りの日本酒をつけた弁当を運んでくる。

午後〇時七分、予定より約二時間遅れて開会することになり、参加者全員がグラウンドに出ていく。まず司会者が開会を宣言し、郷里を思い出して黙禱をおこなう。ついで昭和六〇年度から新しい役員に交代して初めての総会なので、新役員の紹介がある。会長一人、副会長二人、幹事長一人、会計一人、婦人部長一人、婦人副部長二人、婦人部顧問一人、青年部長一人、青年副部長二人、幹事四人の名前がつきつきに発表され、該当する役員が参加者の前で一礼をしていく。

会長があいさつをする。五三回めの総会を迎えることのできた感謝と来賓への出席のお礼、故郷の芝のこと、そして青年たちに援助と協力を要請することを述べたあいさつであった。

「来賓代表あいさつ。関西瀬戸内会会長Iさん、お願いします」と司会者が述べたが、Iさんの姿が見えず、まわりを見渡すと隣接の関西宇検村会の会場で、ちょうどあいさつをしているところであつ

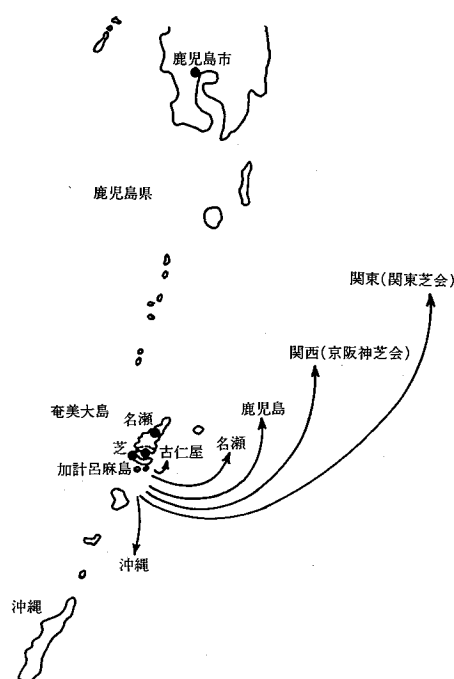
た。京阪神芝会の上部団体である関西瀬戸内会の会長は、三八ある同郷団体のほとんどの総会に出席しており、一日に二つ三つとかけ持ちでまわりながらあいさつをすることもある。そのもうひとつ上の上部団体である関西奄美会の会長はさらに忙しい。急拠かわりに同じ出身校区の同郷団体である阪神薩川会の会長Yさんがあいさつをする。

「敬老の方に記念品贈呈。」対象となる七〇才以上の人十七名の名前がよびあげられる。記念品は千五百円のお茶である。かつて対象は六五才以上であったが、近年七〇才以上になったという。「敬老」の対象者は会費を免除されるが、年々対象者が増え、六五才以上では約五分の一の人が該当してしまうという。「敬老の方」を代表してKさんがお礼のことばをいう。

ついで祝電が披露される。最初に読みあげられたのは、関東芝会の会長Sさんからのものであった。芝出身者の同郷団体は、関西だけでなく、関東、沖繩、鹿児島市、瀬戸内町古仁屋にあるという。

そのなかで関西の京阪神芝会がもっとも古く、また人数も多い。関東芝会は、今年偶然、同じ五月二六日に総会を開いて一二〇名の出席者があつたと反省会するとき報告された。互いに招待状を送り、祝電を打ち、礼状を出し合うが、それ以上の交流はないという。

そして「芝部落会一同」「芝部落区長」「芝老人クラブ」「芝婦人クラブ」というように、母村・芝からの祝電が続く。かつては芝から区長らが総会出席のために上阪したこともあり、来ないときでも例年招待状を送るので祝電は届くという。合計一〇通の祝電が紹介さ



【図2】芝を出た人たちのおもな行き先

れた。

午後〇時一七分、「以上で第五三回総会の式典を終わりとします。」わずか一〇分の式典であった。「青壮年はラジオ体操をして、運動会前の体操をしたいと思います」とアナウンスがある。グラウンドでは久しぶりに会った人たちが、「やあ、どあ元気?」「ええ天気になりましたなあ」と声をかけあう。

幹事長のNさんが、「今、一二時半近くですが、二〇分近くお昼の時間にします。みなさん、どうぞ弁当を開いてください」と放送する。来賓のテントには、各同郷団体の会長や会長のかわりに派遣された役員がそろい始めた。関西瀬戸内会の会長や会長のかわりに派遣された役員が多い。配られた弁当を開いて箸をつけ始めると、接待係となった芝会の役員たちがビールや清酒、焼酎をついでまわる。テントの後ろには軽トラックに酒類とジュースを積んだ酒屋が来て

おり、冷えたビールなどを出し続け、運動会が終わると清算して空きビンをもって帰ってくれる。この出張酒屋は、注文や後始末の手間が省けるので、役員には好評であった。

しばらくして関西瀬戸内会の会長Iさんが関西宇検村会の会場からまわってくる。「ワァナニヤ(私の名前は)I・Y、よろしくお願ひします。芝会の皆さん、……」と島ことばで語りかけ始め、「今日は時間の許すかぎり、皆さんとさかづきを交しながら語りあつていきたいと思ひます」とあいさつをする。

午後一時二五分、グラウンドのほうではやっとかけっこやスパーンレースなどの競技が始まった。テントのなかで酒をくみ交し、談笑する人たちがも競技への参加のよびかけに応じて、二人三人と連れ立ってグラウンドのなかに入っていく。それでも以後の人びとの動きをみると、競技の進行よりも、Iさんのことばにもあらわれているように久しぶりに会う人同士の談笑に關心の重点がおかれており、「グラウンド内の競技が少しさみしかったという声もとどいてます」と反省会でも指摘されていた。グラウンドの競技とテントでの人びとの談笑という二つの状況が同時に進行していくが、テント内外での人びとのようすは次節でとりあげることにして、ここでは主にグラウンドの状況を記しておこう。

この日のクライマックスは婦人部の踊りであった。一六人の女性がそろいのゆかたを着て奄美民謡に合せて踊りながら入場してきた。踊りは二回にわけて四種類演じられる。奄美民謡で踊る棒踊りや加計呂麻音頭、昨年の流行歌「お久しぶりね」をアレンジしたも

のであったが、この『お久しぶりね』はその後十月六日におこなわれた関西瀬戸内会総会第Ⅱ部で、薩川校区のだしものとして踊られることになる。婦人部の人たちはこの日の踊りのために、三月三日の準備会の後、西淀川区の団地集会所に集まり、何度かけいこを重ねたという。拍手のなかを退場した婦人部に多くの「花」がといているとアナウンスがあり、金一封を贈った人の名前がつきつぎと読みあげられる。役員の大半だけでなく来賓や一般会員からも贈られ、その総額は一〇万円になったという。

ついで来賓として出席していた関西節子会会長のKさんが自ら三味線をひきながら島唄を披露する。独特の哀調をおびた響が会場を流れていく。それまでも隣接の会場から三味線や島唄が聞こえてきていたし、テントのなかからは「赤い蘇鉄の実もうれる頃……」と『島育ち』を歌う声も聞こえてくる。この『島育ち』は、どの会でもよく聞かれ、まるで奄美出身者たちのテーマ・ソングであるかのようだ。

午後三時四〇分すぎ、参加者全員で綱引をした後、芝会の人だけでなくこの日参加していた実久や薩川の人も合同で大阪地区と神戸地区の居住地対抗リレーを最後の競技としておこなうことが伝えられる。このころになると、どのテントでもビールや焼酎で酔っぱらった人たちはおしゃべりに夢中で、競技への興味がかなり薄れていた。そして一つのプログラムから次のプログラムへの移行が緩慢になつてくる。なかなか人が集まらず、何度もよびかけのアナウンスが繰り返される。周囲の人にすすめられたり、自ら腰をあげたりし

て五人六人とスタート地点に集まり、七人ずつでリレーが始まる。テントからは応援の声が飛び交い、それを盛り上げるかのようにスピーカーの音楽も軽快な行進曲に変わった。ゴールになだれこむように走ってきた人たちに歓声があがる。

会場はなんとなくざわめき始めた。用意していた景品（マカロニやサランラップなど）がまだ残っているので、もう一つ青年部の競走をつけ加えることになる。二組にわかれて若い人たちはあつというまに走り終わってしまった。

午後四時一〇分、会長のSさんが「みなさん、ありがとうございますました」と閉会のあいさつを手短かにし、「京阪神芝会、万歳」と三唱して運動会は終わった。すぐに役員の人たちで片づけが始まる。会員や来賓の多くは、あいさつを交しながら、阪神武庫川駅のほうへ引き上げていった。隣りの宇検村会でちょうど相撲をしていたのでその見物にしばらく残る人もいる。

三〇分ほどでテントの解体や清掃が終わり、元の河川敷公園に戻った。備品を軽トラックに積みこんで、互いに労をねぎらい、会長が「また遅くならないうちに反省会しますから」と声をかけながら、車でそれぞれの方向に帰っていった。

三、会場の人びと

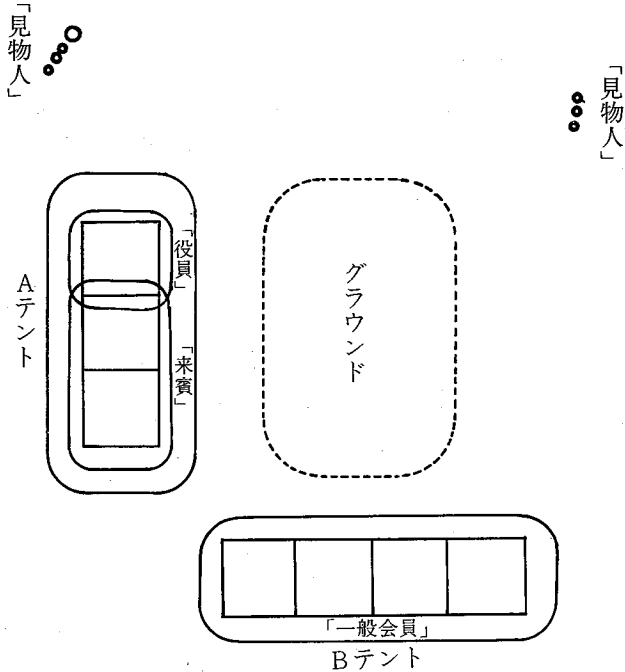
この日の運動会には二百人前後の人びとが参加していた。どのような人びとが運動会に関わり、いかなる関係を互いにもっているの

かという観点から会場の人びとをながめてみると、都市で形成されたものと母村・芝に準拠するものという二つのレベルで人間関係がとらえられる。

第一のレベルでは、まず運動会に関わった人びとが、「来賓」であるか「会員」であるかで大きくわけられる。その区別はこの運動会における空間的な位置にもあらわれており、「来賓」はAテントに、「会員」の三分の二以上はBテントにいた^⑩。「来賓」とは、招待され、寄付をもってやってきた人たちで、「招待者」「寄付者」ともいわれる。その多くは、瀬戸内町の他の字出身者の同郷団体の会長や役員たちであり、この人たちとは互いの総会（すべての会が武庫川でするのではなく、屋内を会場とするところも少なくない）に招待し合い、年間を通して同郷団体間のつきあいをこなしている。また関西瀬戸内会会長、関西奄美会会長も出席していたが、このことは京阪神芝会の上部団体との関係を示している。この日の「来賓」は四五名であった。

「会員」とは、もちろん京阪神芝会の会員のことであり、「芝ンチュウ」と表現される人たちが大半を占める。「芝ンチュウ」とは「芝の人」という意味であるが、「芝生まれの人」あるいは「芝出身者」といえることができるだろう。芝に生まれ育ち、人生の途中で関西にきた人たちである。「会員」のなかには「芝ンチュウ」でなくとも配偶者が「芝ンチュウ」であるために「会員」となっている人もいる^⑪。

「会員」はさらに「役員」とそうでない「一般会員」に区別される。



【図3】京阪神芝会の会場

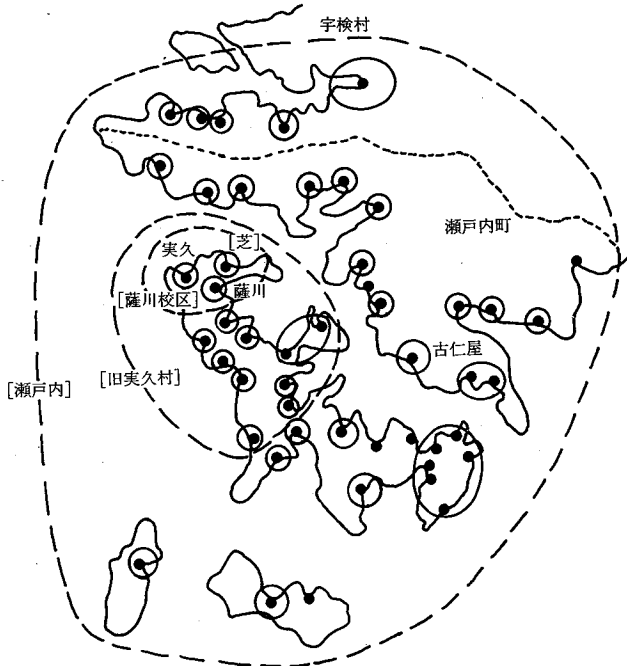
「役員」は、運動会の冒頭で紹介された役員だけでなく、受付、接待、賞品、司会などのこの日の大会役員を含み、Aテントのなかで「来賓」とたえず接触し、また運動会の進行を司っている人たちである。この人たちの半数は、三月三日の準備会と六月九日の反省会に出席していたし、この日は午前七時頃から会場の設営にとりかかっていたという。それと「役員」の大きな特徴は、とくに男性の場合、運動会であるにもかかわらず、背広を着、ネクタイをしめているところにある。このことは、「役員」が「来賓」とフォーマルな関係を保っていることを示しており、またこの運動会には他の同郷団体との交際という対外的（集団間的）な側面と私たちは運動会であっても「総会並びに敬老会」と称するという集団内的な側面とが含まれていることをあらわしている。

「役員」でない「一般会員」は、受付をすませるとBテントへ直行する。奄美伝統の「一重一瓶」で自ら弁当を持参し、三人、五人と親せきや知人ごとにグループになってすわり、おしゃべりに興じている。この人たちにとってこそ、この日は一年に一度「芝ンチュウ」に会えるときであり、武庫川の運動会はそのような場所なのである。「来賓」と「会員」のカテゴリーに加えて、運動会に関わっている人を広くとれば、会場の人びとは「見物人」というカテゴリーが含まれる。「来賓」でも「会員」でもないの、テントの外や周囲の芝生からこの運動会を見物している人たちである。武庫川の近くに住んでいて、自転車にのって見に来ている人もあれば、一人でやってきて知り合いに出会い、芝生で車座になって焼酎をくみ交わすグ

ループもある。ほとんどの人が、瀬戸内町出身とはかぎらなくても、春秋の日曜日、ここでどこかの運動会がおこなわれていることを知っていて、この雰囲気浸りに来た奄美出身の人たちであるようだ。ここにあげたカテゴリーは都市において形成された関係に準拠するものであり、同郷団体内の人間関係と同郷団体間のつきあいの一端を示している。これに対して、母村に準拠するカテゴリーとしてつぎのようなものを指摘できる。

芝会の人、すでに述べたように自らを「芝ンチュウ」と称する。この自称のカテゴリーを中心にして、母村・芝をとりまく地域区分に対応したより広い地域を含むカテゴリーが存在している²⁵。「芝」のつぎに小学校の校区をさす「薩川校区」というカテゴリーがあり、そのなかには芝だけでなく実久と薩川という二つの集落が含まれている。たとえば関西瀬戸内会総会では「薩川校区」が一つの単位となって踊りを出すし、実久や薩川の運動会には同じ校区なのだからできるだけ協力しようとする。また、例年の各運動会のかわりに「薩川校区」会として来年は合同で運動会をしようという意見がでていいる。したがって関西瀬戸内会という上部団体では一つの単位として働いているカテゴリーであり、「芝ンチュウ」一人一人にとっては小学校、中学校の同級生がいたり、通婚圏として血縁・姻縁関係の存在するカテゴリーなのである。

つぎにくるのが、旧「実久村」というカテゴリーである。一九五六年十月、古仁屋町（旧東方村）、西方村、鎮西村、実久村が合併して瀬戸内町となった。「実久村」はすでに存在しないが、戦前より出



【図4】母村に準拠するカテゴリー

(○印は阪神都市圏で同郷団体が形成されている集落をあらわす)

郷している人たちには「実久村」出身という意識が強い。今日でも関西瀬戸内会においては、この四つの旧村と宇検村が単位となつて会長等の役員担当が二年ごとの輪番制でまわつており、いまでも働いているカテゴリーである。

そして「芝」、「薩川校区」、旧「実久村」と広がり、一番大きなカテゴリーが「瀬戸内」である。「芝ンチュウ」が他の瀬戸内出身者と阪神都市圏で出会う場がこの「瀬戸内」をもとにつくられている。関西瀬戸内会であり、奄美の他地域出身者と知り合ったときには、「瀬戸内」の「芝」です」と答えるはずである¹³⁾。

これらのカテゴリーをおおつて「シマンチュウ」と「ヤマトンチュウ」というもつとも基礎的なカテゴリーが存在する。「シマンチュウ」とは「島の人」という意味であるが¹⁴⁾、奄美の人をさして使われるし、自称としても用いられる。この「シマンチュウ」と「ヤマトンチュウ」という対になつて形成されたカテゴリーは、セルフ・アイデンティフィケーションの機能を果しているだけでなく、異質性の高い都市では自分の対面する人びとをたえず二分法的に類別化する働きもしている。

以上のように、会場の人びとの結ぶ人間関係には、都市に準拠するカテゴリーと母村に準拠するカテゴリーの両方が併用されていること、しかもそれが状況に応じて使い分けられることを指摘できる。

四、構成された「ふるさと」

この日の運動会は、Aテントにいた「役員」のカテゴリーに入る人びとが進行をになつていた。その人びとのプロフィールをみると、世代によって出郷の経緯や都市生活歴は異なるが、都市生活が二〇年近くあるいはそれ以上に及ぶこと、そしてもはや老後も帰村の意志のないことを共通点としてあげることができる。たとえば七〇才代のKさんは、昭和九年に来阪し、終戦後の四、五年間、芝に戻つたのを除いて一貫して大阪に住み、H造船で働いていた。芝会では七代目の会長をつとめている。六〇才代のTさんは、尼崎市で小さな鉄工所を経営している。昭和三七年に来阪し、一五年後一度帰郷したが、再度関西に移り住んだ。昭和一〇年生まれの前会長Sさんは、二一才のとき大阪に来て、H造船と運送会社を経て、二〇年前からタクシー運転手をしている。このように都市生活の長い、帰村の意志のない人びとが中心となつておこなわれた運動会は、一種の「ふるさと」となっている。そこには奄美の紺碧の海も、寄せ棟型の四角い家々もないが、彼らのノスタルジーを満ちた状況がつくりだされている。

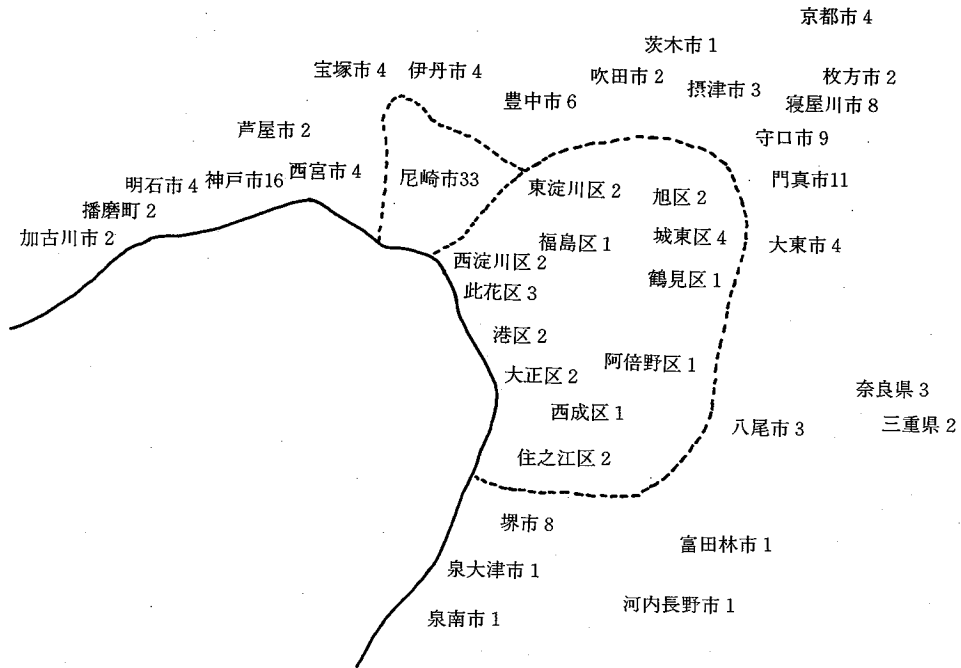
この運動会を「ふるさと」として構成しているものもっとも基礎となつているのが、人間関係である。前節で述べたように運動会は母村・芝と都市のそれぞれに準拠するカテゴリーであらわされる人びとと都市の相互作用の場である。なかでも「一年に一度なつかしいみんなに会える」という一般会員にとっては、「シマンチュウ」の

なかでもっとも狭いカテゴリーである「芝ンチュウ」という人びとの対面が重要である。

芝会の人たちは、瀬戸内出身の他の同郷団体の多くと同じく阪神都市圏においてとくに集住の傾向はない。歴史的にみると瀬戸内出身者にとつては、此花区高見、伝法、大正区鶴町のようないくつかの集住の地点を指摘できる。しかし芝出身者の場合は、かつてからの集住の地点はなく、大都市の人口の郊外化によって分散していったのではなくて当初より分散居住していったといえる。その理由の一つには職業との関連もあるだろう^⑤。したがって、分散居住^⑥である上に住居の移動率の高さ^⑦も考慮すると、役員をしないかぎりこの日が一年に一度シマの人に出会うという機会にならざるをえない。

これらの年に一度会った人びとを媒介するものに島ことばがあり、もちよつた奄美伝統の「一重一瓶」がある。豚骨などの郷土料理を食べつつ島ことばで互いの近況を語りあう状況がBテントのなかで生まれている。また、言葉や食べものだけでなく彼らにとつて「ふるさと」を意味するさまざまなのが、この「ふるさと」の構成に加わっている。それは、三味線でかなでられる島唄であり、踊りを演じることである。この日、隣接の宇検村会でおこなわれていた相撲もその一つである。屋内でするときには「六調」といわれる乱舞のような踊りがとり入れられることもある。

さらにこの「ふるさと」の重要な構成要素となつているのが、現実の母村・芝とのつながりの表現であろう。芝からとどいた祝電の披露は母村の側からのよびかけであり、開会直後の「郷土遙拝」と



[図5] 京阪神芝会165人の居住地域(『京阪神芝会会員名簿』昭和60年5月より作成)

会長のあいさつにおける故郷についての言及は都市生活者の側からの母村への語りかけである。

「故郷芝も、昨年、T氏を新しい区長にむかえ、新生芝をめざし、がんばってられることと思います。この時期は、わが芝字は、山々は若葉で美しいながめをいたし、小鳥さえずる毎日であります。そして海はどこまでも青く、私たちの念頭に思い浮べられます。どうかこのようなところに生れ育ったことを誇りと思い、今後の私たちの活力にいかしていこうではありませんか。」

この会長Sさんのことばは、都市の「芝ンチュウ」に現在の母村の情報伝え、芝へのノスタルジの集合的な共有を訴えている。母村からの祝電の披露も、現実の芝との結びつきを表明し、その名前を聞くと在村の人たちの顔を思いだす人も少なくないはずである。このように人間関係と意味づけられたものによって構成され、現実の芝とのつながりの表現によって強化された「ふるさと」がつくりだされている。

この日、Kさんは「敬老者代表」としてあいさつをし、そのあとは来賓の接待係をしていた。Tさんは開会前から受付に座っており、Sさんは朝の会場設営、会長のあいさつや来賓接待などで忙しく動きまわっていた。そのあい間をみてみんなBテントへ行き、久しぶりに会う人との会話も楽しんでいる。彼らは決して意図的な演出をおこなっているのではなく、意識としては去年したことと同じことを繰り返しているのであり、そうして五三年間芝会が続いてきたのである。それでも第三者の目から見ると、彼らの動きを含めて結果

として「ふるさと」が構成されているとらえられる。それは帰村の意志のない都市に定着した人びとがつくりだす都市のなかの「ふるさと」である。

五、都市のなかの「ふるさと」

— Sさんの語る芝会 —

では、なぜ芝出身の人びとが同郷団体をつくり、運動会を催して年に一度集まり、「ふるさと」をつくりだすのか。この点を現会長Sさんへのライフ・ヒストリー・インタビューで得られたさまざまなディスクリールのなかから、芝会の形成と集まりの理由についてSさん自身の語ることばで考えてみたい。

(1) 過去の「へいなか」の再現

Sさんは、都市において「芝の人がなぜ集まるのか」についてへいなかの環境、へその環境に育った人間味、へ青春時代の思い出」という三つの事柄を指摘する。

奄美大島加計呂麻島は、地理的にみると、山が海岸まで迫って落ちた平地のきわめて少ない島である。その海岸線は複雑に入り組んだりアス式であり、おおよそ大小の湾の奥に集落が一つづつある形態となっている。一九六〇年代後半になって山をけずり車の通れる道路が通ずるまでは、陸路よりも海上を船で往来するほうが交通は容易であった。へいなかの環境とは、そのような地理的条件の制約

を受け、交通が未発達で、外社会との交流が少なく、村落内の人びと同士の間が人間関係の中心であり、とくにその人びとが集まって飲み食いすることが唯一の娯楽であったことをさしている。

「いわゆる昔の生活で、交通も発達してなくて、ただもう自分の村の人たちと以外に娯楽がなかった。映画館もなけりや、新聞もなけりや、新聞とついているのは村じゃ裕福な家、二、三人ぐらいなもんで、そういった情報も全然入らない。そういう生活のなかで何を楽しみに生きてきたかという、いわゆる人と人とのつながり。」

へその環境に育った人間味とは、そのようなへいなかの環境のなかで、「人を恋うる気持ち強くさせた」あるいは「人情味の厚い人間もその環境がつくった」ことをいっている。そして人間関係の親密さと人びとの交流の強さは、労働における「ゆい」や若者組（二七一）のような年齢集団によっても強化され、促される。

「へいなかの人はグループ性を非常に大事にするわけやね。いなかやったらグループつくって畑耕したりね、グループでね、さとうきびね、今日はあっちの家の、来月はあっちの家のというふうに、そういうグループで友だち同士がグループでもってする。そういったことが小さいときからの生活習慣がやっぱ小さいときからついとんとちがうかいな。やっぱ、自分とこやってもらったんだから、お返しもせんとあかんいうなのもあるし。」

Sさんのいう「グループ性」は、仕事だけでなく、遊びにおいても基本であり、とくにへ青春時代の思い出には若者組のことが多く占める。

「グループ交際が若い青年たちの娯楽だったわけですよ。したがって昼間は畑行き、山行き、女の人なんかは袖織つたりしてな、夕方になると若い青年はな、いそいそと家族のもんよりも早く食事をすませて、どっかの集まりやすい、また理解のある両親もつた家にね、女は女で集まっていくわけ。そこに野郎どもは遊びに行く、それが唯一の昔の娯楽でしたからね。」

このような「いなかの環境」のなかでの生活経験と「その環境に育った人間味」という人間関係の親和性、現在では「青春時代の思い出」として語られる労働の共同性と年齢にもとづく集団性が人びとの凝集化の基礎となっていることが述べられている。そして過去の「いなか」で形成されたこれらの点を現在の「都会」で再現しようとするのが、芝会の集まりであるとSさんは位置づけている。

「結局な、いなかの生活環境をね、こっちにもつてきても同じようにやるちゅうのがその主旨やな。もう都会に住んだら、もう都会に慣れてしもうてな、仕事にばかり追われてしもうたら、何もならんいうようなことな。いなかやつたらまつりごとやいろんなあるしな、そういういなかの生活環境をこっちでもやろういうことやから、ま。」

過去の「いなかの生活環境」を再現したいと思う気持ちは、とりわけ同じ年齢集団で強いという。

「そういう若いときに生活してきたもんでね、こっち来ても同じようにね、なにかあるとやっぱり青春時代にお互いね、晩に遊んだ人らに会いたい、見たいために集まってくる。」

(2) 「ふるさと」への参与

ところが、たとえ「いなかの環境」と「青春時代の思い出」について同じ体験をもつていてもすべての人が集まってくるわけではない。

「いなかの人がね、都会に出てくるとね、そういう気持ちをいつまでも、小さいとき、青春時代にやったときの気持ちを忘れずにおる人は、一声かけても集まってくる。けどもたいがい半数やね、半々やね、現在。」

芝会の名簿に載っている一三三所帯のうち、五月二六日に会費を取めたのは七三所帯である。したがって一年に一度の運動会に参加するのはほぼ半数と考えていいだろう。さらに、運動会前後におこなわれた準備会と反省会における出席状態から推察すると、役員会には常時一五人から二〇人くらい、去年はおこなった新年宴会には四〇人から五〇人くらい出席したと考えることができる。これらの数字は、芝会への参与の度合をあらわしている。

一「現役員」をもつとも参与の度合が高いとすれば、二「運動会プラス他の行事に参加する人」、三「一年に一度運動会のみに参加する人」としだいに参与の度合が低くなり、四「運動会にほとんど参加せず、会員名簿にのみ名前が掲載されている人」そして五「芝出身者であるが、住所不明で、会に関わらない人」が参与ゼロということになる。たとえば、運動会において、Aテントにいた人たちは一か二のレベルの参与であり、婦人部の踊りで踊っていた人たちは二

のレベル、青年部の競走で走った人たちはほとんど三のレベル、B テントにいた人たちは三のレベルの参与である。そして一と二のレベルの人びとは、芝会の行事以外に日常生活でも頻繁な往来がある。

「二、三カ月も会わないなあと思つたら、ちよいちよいあつちこつち行つてね、お茶飲んだり、一杯飲んだりして、近況語りながら生活しますわ。まず、一年も会わんちゆうこと、まずないですわ。」

Sさんのように参与の度合のもつとも高い一のレベルの人から見ると、会に参加しないという参与の低い四や五のレベルの人は、つぎのようにうつる。

「その人の性格にもよります。やっぱり人づきあいのあまり好まない人は、もう内地の人みたいだね、ヤマトンチュウみたいな生活しかないでしょ、自分の生活は自分が守ればいいのやと、他人にあまりしよ、こうしよというのは……。ぼくらにいわしたらね、そうじゃない、生活をどうしよというのじゃない。お互いにいなかの人間同士、近況を話しあつたり、やっぱり郷土愛がありますから、遠いなかを思い出して、昔はこうやった、ああやった、いろんな昔語りをするのが楽しみでぼくら集まつて……。」

この参与の度合の差は、つくりだされた「ふるさと」すなわち集合的に共有された過去の「いなか」の再現状況を、現在の「都会」において必要としているか否かを示しているといえる。四や五のレベルの人が過去の「いなか」をなつかしむノスタルジーをもっていないわけではない。年齢の高い人はむしろ強いノスタルジーをもっている場合も多いだろう^⑧。だが、過去の「いなか」の集合的な再

現に加わりたか否かによって差が生じてくる。

運動会の一日は、あくまで構成された「ふるさと」であつて、現在の「いなか」ではない。現在の「いなか」の状況は話題としてとりあげられ、情報が交わされるが、このこと自体も「ふるさと」の一つの構成要素となつている。もちろん現実の芝は、人口の減少と高齢化が進み、産業の衰退によつて過去の「いなか」・芝とは大きく変容している。それでも、過去の「いなか」へのノスタルジーを、構成された「ふるさと」よりも現在の「いなか」・芝で満たすことも一つの方法であろう。

しかし、Sさんのことばにあるように、どこでノスタルジーを満たすかというよりも、現在の「都会」における人間関係の結び方が「ふるさと」への参与の度合の差を生じさせていると考えられる。

Sさんを例にとると、都市生活が三〇年近くに及び、帰村の意志はなく、いずれ墓も大阪に移す考えである。都市生活における職場や近隣などでのさまざま人間関係の一つの形態として、母村を機縁とした芝会で結ぶ人間関係があり、トータルな人間関係のなかでみると重要な位置を占めている。都市のなかにたえず「ふるさと」を介在させているSさんの都市生活の一面を物語っている。

(3) これからの「ふるさと」へ

五月二六日に参加した人びとは、四〇才代後半から五〇才代、六〇才代の人が多かつたように思う。小学生の子どもを連れて来た人

や二〇才代、三〇才代の若い世代の人も来ていたが、Aテントのなかにはほとんどいなかった。

「今後の会の運営を続けていくためにも、いかに若い人らがついていくかちゅうことも今後の課題ですわ」とSさんが述べるように、若い人びとを芝会にどう引きつけて、会に関わるようにさせていくかということが課題とされている。若い世代の人びととは、芝で生まれ、薩川小学校、薩川中学校を卒業後、そのままあるいは古仁屋高校を経て、進学や就職で関西へ来た人たちと、芝出身者の子どもたちいわゆる二世、三世をさしている。前者については、「若い子でも来るのはいなかからでできた子がでてる」が、「ちよつと声かけたら来るけどな、あの連中も声かけなんだらきえへん」集まつてくることは来ます。来ますけどね、自分らが中心になってやらなあかんやつていうな、そういうことはないね」といわれるように、参与のレベルは三か四であり、年に一度来るか来ないかという関わり方である。

二世、三世については「自分たちの子どもをこういつたいなかの集まりにどのようにして連れていって、どのようにして楽しみをもたせて、人と人とのつながりをしようかと考えておる。ところが子どもたちにいわせると行つたつておもしろみがないつていうわけ」と語っている。過去の「いなか」は、個人の経験であると同時に、「芝ンチュウ」に共有された経験である。共有にもつづいて集合的再現が可能となっているが、運動会は、その共有経験の再現だけでなく、伝達の間でもありうる。「ふるさと」としての意味が付与され

たものを表現することによって、過去の「いなか」を知らない二世、三世が「ふるさと」を経験でき、運動会を、阪神都市圏において奄美の文化を世代的に継承する場とすることもできるだろう。しかし、それ以前に、経験のない人びとに再現の場へ加わることを要請することがむずかしいことはSさんも感じていると思われる。

今後、この一日は、過去の「いなか」の再現の場から現在の「都会」における人間関係の一つの展開の場としての側面がより強くなっていくのではないか。その変化は、母村での若年層の激減による新たに「いなか」から出てくる若い世代の減少と、「いなか」の経験のない二世、三世の増加とによって拍車をかけられるだけではない。芝出身者自身も都市生活が長くなるにつれて都市のもつ意味が少しずつ変わっていき、個人の経験のなかでの過去の「いなか」の位置づけがしだいに異なつてきていることによつても変容が促されていくだろう。

六、おわりに

五月二六日の一日は、奄美出身者が都市のなかでつくりだしている世界をかいま見せてくれた。京阪神芝会は、三八ある関西瀬戸内会のなかの同郷団体の一つである。それぞれの会には、母村の差異（集落の規模や生業、地理的条件等）や会の歴史、会内部の人間関係、個人の同郷団体に対する考え方などにもつづいた特徴を指摘できるだろう。だが、同郷団体の形態や活動においては明確な共通性

があり、とりわけ「ふるさと」をつくりだす状況は、京阪神芝会だけに独自のものではなく、他の会でも共通に見られるものである。

一九五〇年代頃までは、奄美諸島と阪神都市圏の移動は、異文化間のマイグレーションにも匹敵するほどの文化的差異をもつものであった。その後、日本のすみずみまでマス・メディアが行き渡り、生活様式にも大きな差がなくなるにつれて、かつて同郷団体がもっていた都市への適応を補助する機能は確実に弱くなっている。そして一九六〇年代までに都市にきた人びとにとっても、都市生活が長くなるにしたがって、都市とは適応の対象ではなくて自分の生きていく場そのものにならなくなってきている。帰村の意志もなく、墓も都市に用意するつもりの人びとが「ふるさと」を象徴するものによって構成した運動会に参加する姿は、いわば祝祭のなかにいる人のものであり、武庫川の日が祝祭の日であることを示している。そのなかで一年に一度、地縁・血縁という出自によって形成されたアイデンティティを再確認している人も多いだろう。都市社会において奄美出身者が日常的にディスコミュニケーション状況にあった時代には、アイデンティティの頻繁な確認が必要であった。しかし祝祭となった「ふるさと」は、このアイデンティティ確認の頻度の減少と形式の変化が進んでいることを物語っている。このようにシンボリックな側面が強くなり、年に一度に集約されたアイデンティティ確認の場となりつつある「ふるさと」を都市化された個人との関係でみていくことも、今後の一つの視角であると思う。

注

- (1) [図1] 参照
 - (2) 松本通晴「都市の同郷団体」『社会学評論』三六巻一号、一九八五年。
 - (3) 京阪神芝会は、昭和初期から大阪に出てきていた芝出身者によって昭和七年頃つくられる。戦時中から終戦直後にかけて集まりにくくなったが、大正区鶴町あたりで細々と続いていたという。現在、所帯数一三三、一六五人(一九八五年度名簿掲載者)。会長のSさんによれば、「大工さんが多い」そうである。五月の総会を毎年必ずおこなっているほかに、定期的に新年会や婦人部の旅行などを行っている。
 - (4) 『瀬戸内町勢要覧 昭和五九年版』瀬戸内町役場、昭和六〇年。芝は、一九七五年に世帯数七〇、人口二二〇人であったから、人口の減少が著しい。
 - (5) 一九八五年三月三日と六月九日の役員会は、大阪市西淀川区の団地の集会所で開かれた。また、Sさんのライフ・ヒストリー・インタビューは、一九八五年二月九日、大阪市港区で筆者がおこなったものである。
 - (6) 本稿をまとめるにあたってつぎの文献が参考となった。
溝部明男「戦友会の日」『空母燕鷗戦友会』再訪、高橋三郎編著『共同研究・戦友会』田畑書店、一九八三年、一三一—一〇七頁。
佐藤郁哉「暴走族のエスノグラフィー——モードの叛乱と文化の呪縛——」新曜社、一九八四年。
- Suttles, G., "Urban Ethnography: Situational and Normative Accents," *Ann. Rev. of Sociology*, vol. 2, 1-18, 1976.
- (7) 関西瀬戸内会を構成する同郷団体は、「表1」のようになっていく。
 - (8) [図2]「芝を出た人たちのおもな行き先」を参照。
瀬戸内町古仁屋は、奄美大島のなかでも名瀬について都市的などころである。その古仁屋には、「古仁屋在住芝会」(七二所帯、二二三人、一九八五年現在)があり、古仁屋で芝の八月踊りをしたり、正月に総会を開いている。「古仁屋在住芝会」と母村・芝の関係には、「拡大村落」という視点が有効であると思われる。芝と古仁屋は小型船でもフェリーを使って陸

路でも約一時間で往来できる。日常は古仁屋で生活し、過疎化し高齢化した芝を祭祀や葬式において補助する重要な機能を果たしている。

田島忠篤「村落共同体と郷愛会の機能」『南島—その歴史と文化4』南島学会編、一九八二年、二〇五—二二五頁。

○安齋伸、指田隆一、濱名篤、小島清志、田島忠篤、平田周一「出郷者の移動形態と母村の変容」『上智大学社会学論集6・7』上智大学社会学科、一九八一・一九八二年、五八一—〇二頁。

小島清志「郷愛会組織と母村の交渉—加計呂麻島西阿室の事例—」『南島史学』二二・二三号、一九八三年、四六—七三頁。

名瀬市には「名瀬市在住旧実久村会」があり、そのなかに芝出身者（二六所帯）は入っている。（毎年一回、一月に総会）

なお、瀬戸内会は、関西のほかには東京、鹿児島、沖縄にあることが知られている。

- (9) その他、京阪神芝会と母村・芝のつながりには、毎年豊年祭のときに芝の老人会に祝金五千円を送ること、芝で葬儀があるときに京阪神芝会の名で弔電を打つこと、があげられる。個人的には、家族や親せきが芝にいる人たちは親密な相互連絡を日常おこなっているようだ。
- (10) 「図3」「京阪神芝会の会場」参照。
- (11) 「会員」の規定をめぐっては、主として会費納入の有無を「会員」であることの基準とするかどうかについて役員会でいくつかの意見がでていた。また「会員」死去の際、京阪神芝会から香典五千円とシキビをおくることが三月三日の役員会で決まったが、会費を納めてない「芝ンチユウ」にもおくるか否かで論議がおこる。結局、「不幸があつた場合、これはやっぱり、親睦団体やから、たとえ会費が未納であつても、芝の出身者であれば、やはり香典とシキビはやるべきと思うんですけどね」という会長Sさんの意見にまともった。

- (12) 「図4」「母村に準拠するカテゴリー」参照。
- (13) 行政上は、瀬戸内町と宇検村にわかれているが、歴史的には宇検村も含めて「瀬戸内」という名称で呼んできた。関西瀬戸内会はそれにもとづいている。

(14) 奄美諸島では、集落を「シマ」というから、当該の「集落の人」という意味でもある。ただ、「ヤマトンチユウ」と対の名称としてとらえるときは、「島の人」が妥当であると思う。

(15) Sさんの語ることは端的に示されている。「ほとんどの人が途中からでてきたとるでしょ。いい年になってから、三〇才、四〇才や五〇才なつてから出てきたとるでしょ。したがってね、そういう人びとの、生活するために仕事せならんけど、そういった仕事なにかつていうと、それまでいなかでやつた、大工さんなるか技術屋さん、タイル工なるか、運転手なるか、そういうふうなことでできないでしょ。そうすると、自然にね、分散していく。」

(16) 「図5」「京阪神芝会一六五人の居住地域」参照。

(17) 「表2」「会員の住居移動—一九七八年と一九八五年の住居比較—」によると、七年間の間に変化のなかつた所帯は三五・六%にすぎない。（単身者も一所帯とみなした）

a、移動しなかつた所帯(同じ住所)	62	所帯数
b、移動した所帯	38	
c、消えた所帯(人)	41	
d、あらわれた所帯(人)	33	

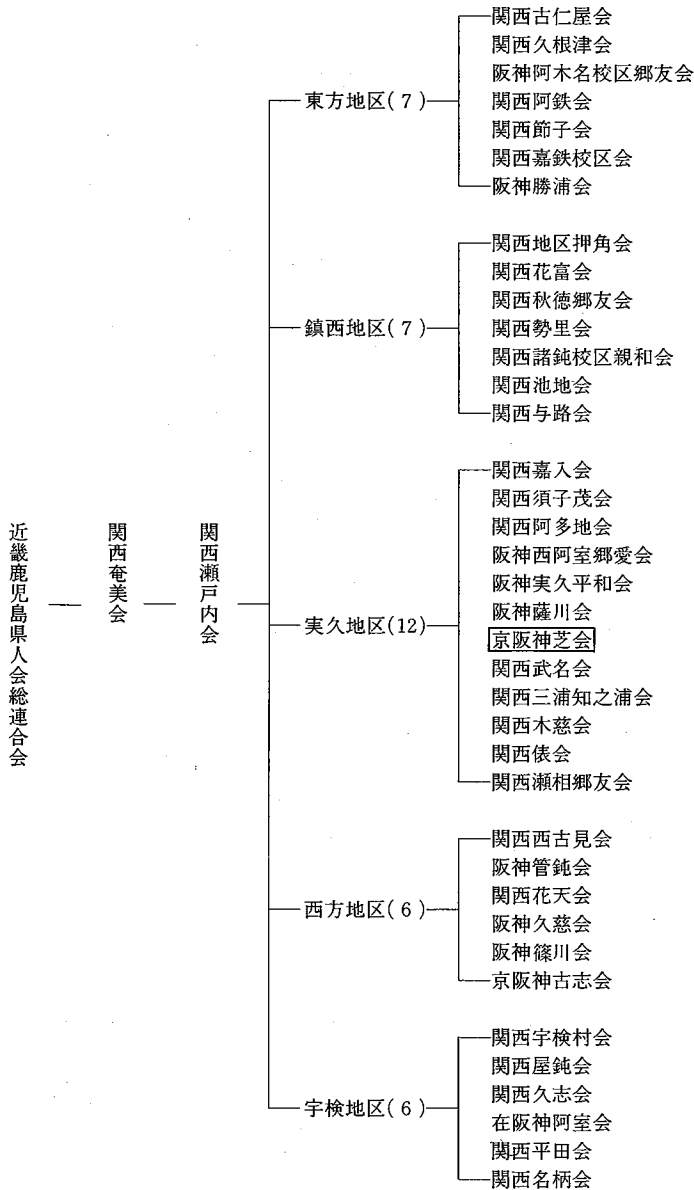
a + b + c = 一四一所帯「関西瀬戸内会30周年記念誌」
 一九七八より
 a + b + d = 一三三所帯「京阪神芝会名簿」一九八五より

【表2】 会員の住居移動
 —1978年と1985年の
 住居比較—

(18) ○細辻恵子「ノスタルジの諸相」作田啓一・富永茂樹編「自尊と懐疑—文芸社会学をめざして—」筑摩書房、一九八四年、一〇一—一二八頁。

【付記】
 本稿は、一九八四年度トヨタ財団個人奨励研究助成の成果の一部です。京

[表1] 関西瀬戸内会を構成する同郷団体



阪神芝会の会長Sさんはじめ芝会の皆さん、芝のOさん、古仁屋のYさん、名瀬のSさん、そして関西瀬戸内会の会長Iさんやそのほか多くの方々の御協力を得ました。記して心から謝意を表します。